

## オレリエン・ハンターの スイスへの誘い

### 再会の秋(下の巻)



前回の引き続きで、母と過ごした秋休みを紹介します。今回は行ってきた山形国際ドキュメンタリー映画祭と名古屋で再会した友達のことについて書きます。

まず、山形へ行っている間に連絡を取ろうとした人に謝らなければいけません。いまだき信じられがたいことですが、家を出たときに携帯電話を忘れてしまいました。最初どうしようと思って、おっちょこちょいな自分が情けないとちょっと落ち込んだのですが、ないことに慣れていけばいほど、携帯電話のない生活もいいなと思うようになりました。いつでも、どこでも、誰とでも連絡が取れるようになったのは便利だと認めていますが、携帯電話のなかった時代はそんなに昔ではあるまいし、携帯電話に軽く依存してしまっている自分と連絡が取れないことで困らないことに気がきました。これからもっと携帯電話を忘れていきたいと思いました。

山形に着いた晩、母に河瀬監督とその仲間を紹介して、一緒に東北のおいしい郷土料理と地酒で楽しい夜を過ごしました。「ありがとう」や「いただきます」程度の日本語しかできない母ですから、楽しめるように皆の会話を通訳していましたが、母が「一々訳さなくて大丈夫よ、なんとなく分かるから、分からないときに聞けよ」と言うてくれて、英語とフランス語が少しできる河瀬監督とすっかり仲良くなって、会話がちゃんと通じていたらしいです。母に驚かされましたが、スイスを訪問した鏡野町の皆さんから聞いたように、心が通じ合うのに言葉がいらないと改めて実感できました。

さて、前回で紹介したテーマに沿ってのディスカッションの内容をまとめて紹介します。

**記憶と再生** 初回のディスカッションでは、イヴォ・ゼンさん、河瀬直美さんと佐藤真さんの監督3人が話し合いました。このテーマは映画の根本的な要素、ちなみに記録性と再生性に触れるので非常に面白かったです。映画とは、特にドキュメンタリー映画の場合、カメラで現実をありのままに正確に記録することです。ただの記録なら何の価値もありませんけれど、監督がその記録を上映のときに観客と共有することによって、「記録」は一種の「記憶」となって、その記憶は人間の持つ記憶(思い出)と違って何回も上映でき、さらにそのときの感情や感動をいつも「再生」できます。が、フィルムが人間の記憶と同じように古くなって変質したりするところがあって、改めて映画はすばらしいものだと思いました。

**のぞき見趣味と癒し** このディスカッションに出席した監督は瀬戸口未来さん、園部真実子さん、ヤエル・パリッシュさんとピーター・メトラーさんでした。「私小説」があるように、「私映画」というドキュメンタリー映画のジャンルがあります。そういった映画のテーマは監督自身、あるいは監督の身近な人々、家族なり恋人なりですが、できた映画を見る観客は「のぞき見趣味」を持っているのではないかと思う人が少なくありません。が、監督たちは自分をさらけ出して見せるために撮っただけで

はなく、扱うテーマに悩まされているからこそ撮らないでられないそうです。映画を見せる時に、家族のことをもっと理解したり、自分の思っていることが整理したりして、監督が癒されるそうです。そして、感情移入しやすい映像と音の世界ですから、観客も癒されます。

**身体と主観** 最後のディスカッションのゲストはかわなかのぶひろ監督、ピーター・リエヒティ監督と鈴木志郎康監督でした。

それぞれの監督は病気、禁煙と老いること、ちなみに自分の「身体」を主観的に扱います。長く語り合いましたが、一番印象に残ったことを紹介します。作家の場合、言葉と文章の間にギャップがあって、客観的になれますが、ドキュメンタリー監督の撮った映像はそのまま映画となりますから、そのギャップはありません。ちなみに客観的になれなくて、彼らの映画はエッセイとなり、カメラは万年筆と化します。ディスカッションの内容は理屈っぽく思われるかもしれませんが、映画好きな私にとって刺激的でした。ドキュメンタリー映画の可能性と必要性を改めて覚えました。

山形を後にして、母がスイスに帰る時が来ました。最後の夜を去年と同じように関空の日航ホテルで過ごし、同じ鉄板焼きのレストランで食べました。

母と別れた後、留学したときの仲間、ブラジル出身の美希さんに会いに名古屋へ行きました。彼女と知り合ったときに、すでに日本人と結婚していましたが、6年間で二人の母親となりました。佑介君(5)と由香ちゃん(3)。写真で見るとてもかわいい兄妹のようですが、ケンカしたり、甘えたり、はしゃいだり、泣いたり、笑ったりする一番元気な年頃です。私なら絶対手には負えないと思いつつ、立派な母親となった美希さんは格好良かったです。もう一度写真をご覧ください… 幸せそのものに見えますが、実は夫婦間いろいろ悩みを抱えて、夫婦のあり方、愛の表し方、国際結婚ほかについてたくさん話し合いました。



美希さんと子供たち

名古屋に戻るのには本当に久しぶりでしたので、南山大学の先生やスタッフに会いにいってみました。私たちが勉強した時代の先生とスタッフは一人ずつしか残っていませんでしたが、覚えていてくれたのが嬉しかったです。名古屋で2泊3日も過ごしたけど、最後の夜に、いりなが駅の近くにある行きつけのバー、「SOUL CAFE」を訪れました。まだあるのかなと半信半疑で行ってみると… ありました。「ミニミニ不動産」の下にありました。階段を下りて、ドアを開くと、店内は少し改装されてありましたが、雰囲気は変わっていませんでした。カウンターに座って、マスターがやってきて「アレ〜、オレリエンじゃないか!? 久しぶりだな!」とすぐ思い出してくれました。お互いの6年話を話しながら、いつも飲んでたカクテルを注文もせず次から次へと出してくれて、遅くまで楽しく飲ませていただきました。翌日、たくさんの思い出と懐かしさを胸に、津山へ電車で帰りました…

皆さん、寒くなりましたので、風邪をひかないように。次回も、お楽しみに。メリー・クリスマス! 良いお年を!



三日目のディスカッション(右から): ニヨン映画祭のジャン・ベレさん、かわなかのぶひろ監督、ピーター・リエヒティ監督、鈴木志郎康監督と山形映画祭の藤岡朝子さん

が、監督たちは自分をさらけ出して見せるために撮っただけで